

—E. Nepal, India (below Phidein, 3000 ft) no. 2179, saxicola, leg. D. D. Awasthi, 1953.

Similis Parmelia scortae Ach. sed differt reactione aliâ. Etiam valde similis est *Parmelia nimandairana* Zahlbr., quae attamen ad sect. Amphigymniam pertinent.

今から24年前に台湾台中州溪頭で採集した標本で形体並に反応が *Parmelia nimandairana* Zahlbr. (sect. Amphigymnia) によく似た種であるが裏面の擬根毛が葉体の周縁迄密生し *Hypotrachyna* 節に属するからこれとは異なる。爾来台湾からも日本内地からも採集されないし殊に無子器であつたので其儘に保存して居たが最近印度 Lucknow 大学の Awasthi 氏が送つてきたネパール産の標本の内に有子器のものが一箇あつたので此の疑問の種はヒマラヤ系の一員であることを知り一応新種として発表する。学名は歐洲産の *Parmelia scortea* Ach. に稍々似て居る点を表示して居る。

○タイトゴメとトボシガラの名の由来 (前川 文 夫) Fumio MAEKAWA:

Etymological note on two Japanese plants suggesting their relation to rice name.

タイトゴメ (*Sedum oryzifolium* Makino) の語源については学名の種小名が示しているとおり、また牧野図鑑のその条下にも述べられているように粒が細長くて皮が赤い米で、日本で昔から田園の中へ雑草的にまぎつて来たり、また時には端境期の飯米にするために田のへりに植えたりもする大唐米 (ダイトウマイ) から来ている。牧野博士によればこれは土佐の西南端にある柏島の方言であるが、それを一般名に採用されたのである。大唐米は揚子江から南及び西南へひろく栽培されているいわゆる秈米と同一系統のもので、粒は落ち易く、細長く、炊いてからさめると、ばさばさでひどく味が落ちる点などで、米として下のもの、ただ早くみのる点と炊きぶえがする点がとり柄のものである。この粒の形に「たいとごめ」のあの肉質の葉の形が似ているところからの方言で、大唐米が一般に行きわたっていることを暗示する。大唐田という谷すじの地名は中国地方には沢山あると柳田国男氏は稲の日本史の中で述べておられる。そして同じ様な条件のところを九州ではそうは呼ばずに唐法師田という由である、これは同じ米の品種を唐法師、又は乏など文字は違うが発音は同一の別名トウボシ又はトボシで呼んでいることを示す。ずつと昔に法師子という名の米があり、それに新米のものを区別して唐をつけ、子が脱落しとぼしということになつたらしい。もしかするとこのとぼしの細長い穀類に似ているので、とぼしの穀 (から) として今我々のいう *Festuca parvigluma* Steud. が本草学時代に名づけられたのではないかと推定する。とぼしみを点火とみて関連を求めるより、より自然的と思う。(東京大学理学部植物学教室)